吉田健一著作集

XXVIII

定本 落日抄

集英社

吉田健一著作集 第二十八巻
定本 落日抄
昭和五十五年十二月二十日 第一刷印刷
昭和五十六年一月四日 第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ッ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二三〇）六三六一〈文藝出版部〉
東京（二三八）二七八一〈販賣部〉
整版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
©1981 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171028-3041 落丁本・乱丁本はおとりかえします

吉田健一著作集　第二十八巻　目次

定本　落日抄

思ひ出　一
京都　二四
疊敷き　一六
あんよはおじよず　一九
三題噺　二四
ドナルド・キイン氏のこと　三一
道草　三六
變化　四一
風俗時評　四五
寺小屋　五九
人間以外の動物と人間　八四
外國の生活　八六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本棚に並んだ本　八九
＊
酒談義　九一
金澤　一一七
明治の時代　一二〇
東京所見　一二三
二日醉ひ　一二六
酒、旅その他　一二九
閑文字　一三二
呉の町　一三五
酒と肴　一三七
腰辨になるの記　一四一
老後　一四四

文學と學問　一四七
ロンドン訪問記　一五三
公害　一五九
挽歌　一五九　紙屑　一六〇　隣の買ひもの　一六二
背後關係　一六三
酒、肴、酒　一六五
アメリカの酒場　一七〇
ロンドンの飲み屋　一七三
外國での日本文學　一七六
神戸の味　一八一
*
超特急　一八三
童心雜記　一八七

我が町　二〇〇
留學の頃のこと　二〇四
禁酒の勸め　二〇七
乞食と王子　二一五
年のせゐ　二一七
動物　二一九
サナトリウム　二二二
金澤、又　二二三
季節　二二六
河上さんのこと　二二〇
英語で書いた文學　二二三
本のこと　二二七
英國のこと　二五二

昔の「批評」　二五五
＊
父のこと　二六九
父を語る　二七三
父を廻つて　二七六
又　二八四
帝國海軍　二八七
言葉その他　二九八
墓　三〇二
とぼけることの效用　三〇五
季節、又　三〇九
戰後　三一三
金澤、又々　三一五

母のこと　三一七
正月　三一九
本の話　三二二
電話がない話　三二五
藥　三二六
文學界の七十年　三二八
美味求眞　三二〇
春　三二四
場所　三二七
樫村實　三二一
解題　三二七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

定本 落日抄

思ひ出

これはまだ子供の頃の記憶である。第一次世界大戰が終つて間もない頃の或る年の夏、パリに近いフランスの田舍に行つてゐて、そこで一人の青年と友達になつた。と言つても、向うはもう明かに青年と呼べる年になつてゐて、こつちはほんの子供だつたから、友達になるといふよりも、遊ばせて貰つてゐる形だつたが、兎に角、毎日會つては一緒に町を散歩したり、その邊の大きな森の中に入つて行つたりした。そして言葉も陸に解らなくて、年の違ひからしても大に語り合ふといふやうなことはあり得ないにも拘らず、この青年のことが今でもはつきり記憶に殘つてゐる位、强く惹き付けられたのは、無口な性格らしくて、お互に言葉が解つてもさう話などしなかつたのではないかと思はれるその態度のどこかに、自分は自分でこれからも生きて行く他ないと決めてゐるといふ風な所があるのが、子供心にも感じられたからである。それでゐて、こつちが何か危いことをしさうになつたりするのに對していつも氣を配つてゐた。

長男に生れて兄といふものを知らない自分に一人の兄が出來たやうなものだつたが、その付き合ひ

は全くその時だけで終つて、間もなく我々は別々の場所に去り、それから二度と會はなかつた。歸る前に、その青年は青い十字架の形をした勳章の綬が取れたのをくれて、それをどこかで拾つたのだと言つた。何氣なしに貰つて、そのうちになくしてしまつたが、もう少し譯が解るやうになつてから、その青年はベルギイ人で、住んでゐた町だか、村だかが大戰中に全滅した時、その兩親を失つたのだといふことを聞かされた。勳章はその燒跡で拾つたものだつたのかも知れない。一種の戰爭孤兒とも言へる譯で、孤兒には違ひなかつた。それも、少年から青年にならうとしてゐる時にさうして兩親を失つたのであつて、いつもどこか、寂しいのであるよりも、嚴しい所があるのが感じられたのはそのせゐだつたと見ていい。それは毅然としてゐるといふやうな印象だつた。

今から振り返つても、あれは好もしい青年だつた。戰爭で兩親を一時に失ふといふのは、戰爭があれば、誰にでも起り得ることである。自分の眼の前でといふことだつてあるので、その衝擊はただそれに堪へて生きて行く他ない。全くさうする他にどうにもなるものではないので、その青年はそれを自分の全身で受け留めてゐるのが解つた。キリスト教徒になつて、往來に立つて人前で懺悔するなどといふのは、見方によつては隨分、淺薄な信仰の押し賣りである。戰爭を呪ふといふのも、もしそれで自分の悲みを紛らすことが出來るものならば、その悲みがどの程度のものだつたのか疑ふことが許される。悲みはこれと取り組んで自分の力で振ぢ伏せる他ないものであつて、もしその原因が戰爭にあるならば、悲みと眞正面から向き合ふのと、壇の上に立つていい氣になつて喋り立てるのとは違ふ。その青年に暗い影といふやうなものは少しもなくて、ただその過去の出來事があつた爲と思はれて何か、すつきりしてゐた。

日本人が觀念的であるといふことを我々はいやになる程聞かされてゐて、實際にさうかどうかは、その日本人の一人である自分自身に聞いて見るのでなければ解らない。併し觀念的であるのと、事實にぶちのめされた經驗がないのが同じ一つのことであるのは確かであつて、この頃になつて日本でやたらに戰爭反對が唱へられるのは、あれだけひどい目に會つてまだ戰爭といふものを知らずにゐる日本人がゐるからではないかといふ氣がする。戰爭はそのうちになくなるかも知れない。併し人間が事實にうちのめされるのが繰り返されて行くことに變りはなくて、その時、自分はどうするかといふ段になると、あの青年のことを思ひ出す。

京都

毎年、金澤から大阪へ行つて灘に寄るのをもう何年も續けてゐて、その度毎に汽車で少くとも京都を通り、偶には降りることもあるが、京都で泊つたこともなければ、京都を指して旅行したこともない。戰爭が始る頃までは何度も行つてゐて、その街の記憶もはつきり殘つてゐるのに、そんなことになつてゐるのは、要するに、戰後の京都といふものに馴染みがなくて、それが出來る機會も今までなかつたからなのだらうと思ふ。併しそれなのに時々、加茂川の流れや、細かい格子が窓に嵌つてゐる家が竝ぶ路地や、京都を圍む山の輪廓が頭に浮んで來る。

尤も、戰後に一度だけ、廣島の方に行く途中で京都で降りて、三日ばかり過したことがある。戰前ならば柊家に泊つて、飲む合ひ間に博物館に行つたり、寺を廻つたりする所だつたのであるが、あの戰爭があつた後で昔の人達が覺えてゐてくれるとも思へず、ただ京都で飲むのが目的で、その頃、仕事の上で關係があつた出版社の紹介でちきり屋といふ宿屋に泊つた。これもいい宿屋だつたが、馴染みがある譯ではないし、かと言つて、どこに行つて飲んだものか解らなかつたから、只管にこの宿屋で飲んだ。戰爭中の統制が外されて、やつと清酒が出廻り始めた頃だつたから、この酒は旨かつた。夜汽車で朝着いて、晝まで寢直してから飲み始め、戰爭中のやうにお一人樣一本などといふことがな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com